

研究主題

学習指導要領を具体化する

小・中・高等学校国語科の指導法に関する研究

—学びの連続性を考慮し、単元を貫く言語活動を位置付けた授業づくり—

【研究担当者】 長根義広 横田昌之

【この研究に対する問合せ先】

TEL 0198-27-2735 FAX 0198-27-3562

E-mail kyouka-r@center.iwate-ed.jp

I はじめに

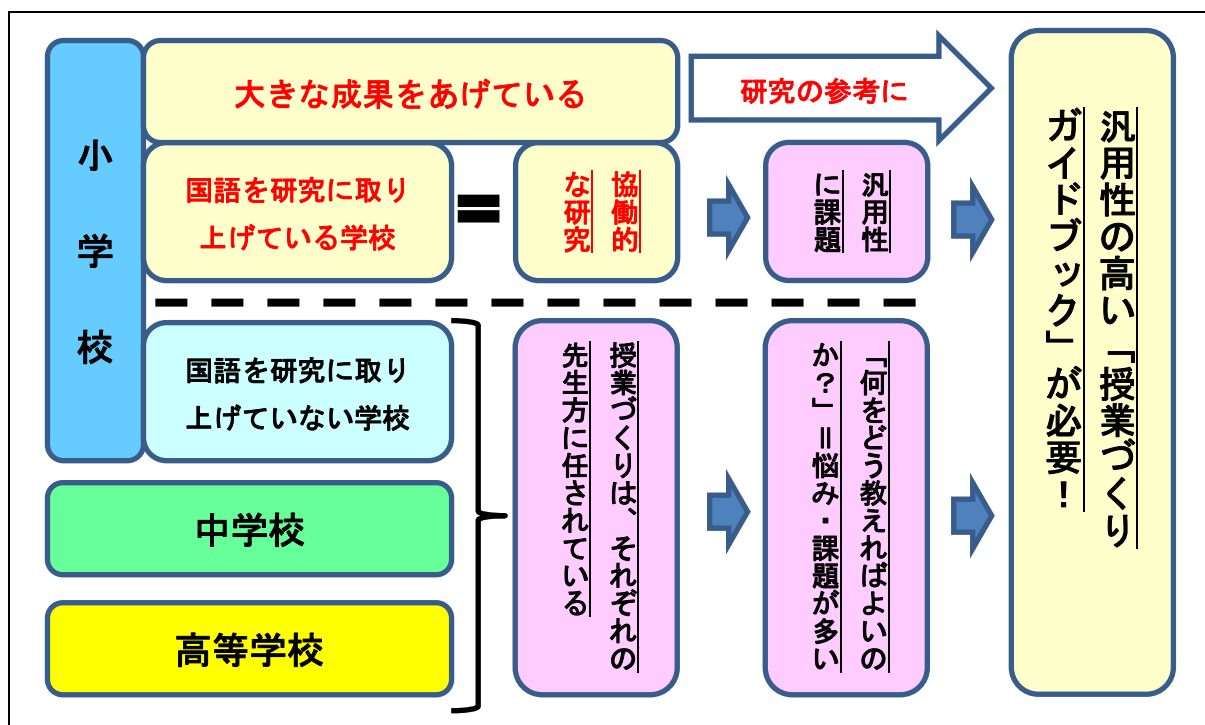
この研究は、小・中・高等学校国語科の日常の授業改善に資するための研究です。

学習指導要領や学習指導要領解説国語編等から、どのような授業が求められているかを読み解き、文部科学省の教科調査官や大学の研究者等の講演や書籍、全国の研究校の公開授業等から具体的な指導法を学び、それらを再構成して研究の成果を「授業づくりガイドブック」にまとめました。なお、今回のガイドブックは、「読むこと」領域に絞った内容となっています。

作成したガイドブックはマニュアルではありません。ですから、この通りにやろうとするのではなく、ここからヒントを得て、先生方一人一人が授業改善に向けた工夫をすることが大切です。

II 「授業づくりガイドブック」の必要性

岩手県内の国語科授業研究の現状を概括的に【図1】のようにとらえ、課題を解決するためには、汎用性の高い「授業づくりガイドブック」を作成することが必要であると考えました。



【図1】小・中・高等学校国語科授業研究の現状

Ⅲ 小・中・高等学校共通の「授業づくりガイドブック」作成の意図

なぜ、このガイドブックを小・中・高等学校共通のものとしたのかについて説明します。

【図2】の左側のように、これまでの指導では「当該学年や当該校種内における指導内容について責任をもって指導する」ことが一般的だったように思います。そのため、学年や校種を越えた系統的指導に課題がありました。

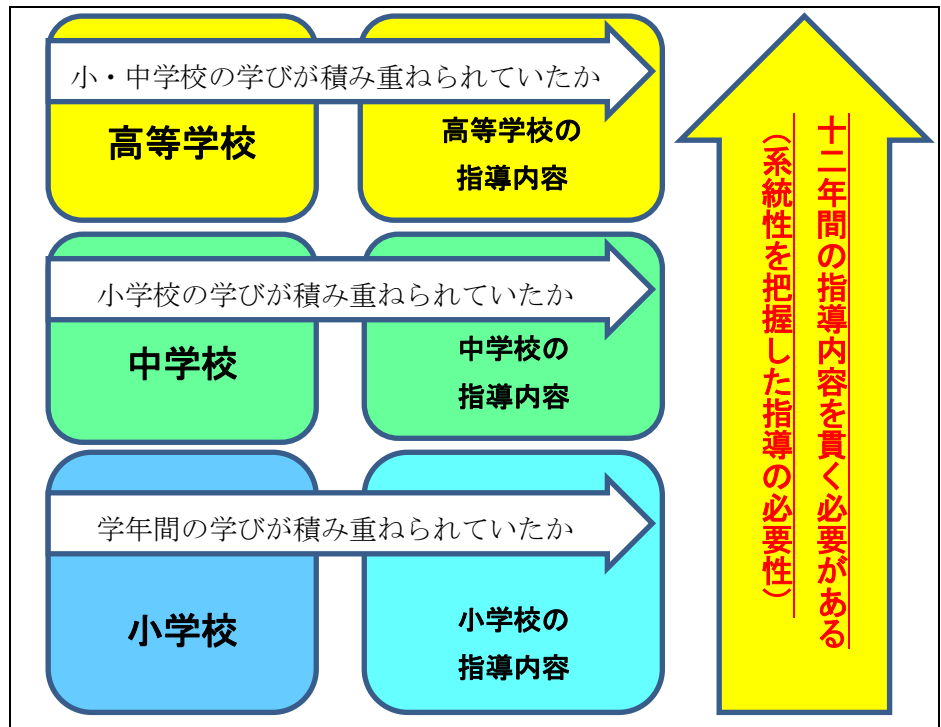
児童生徒の立場から考えると、学びは連続していなければならない、学年間はもちろんのこと、小学校と中学校、中学校と高等学校の間にも溝があってはなりません。

したがって、【図2】の右側の矢印のように小学校

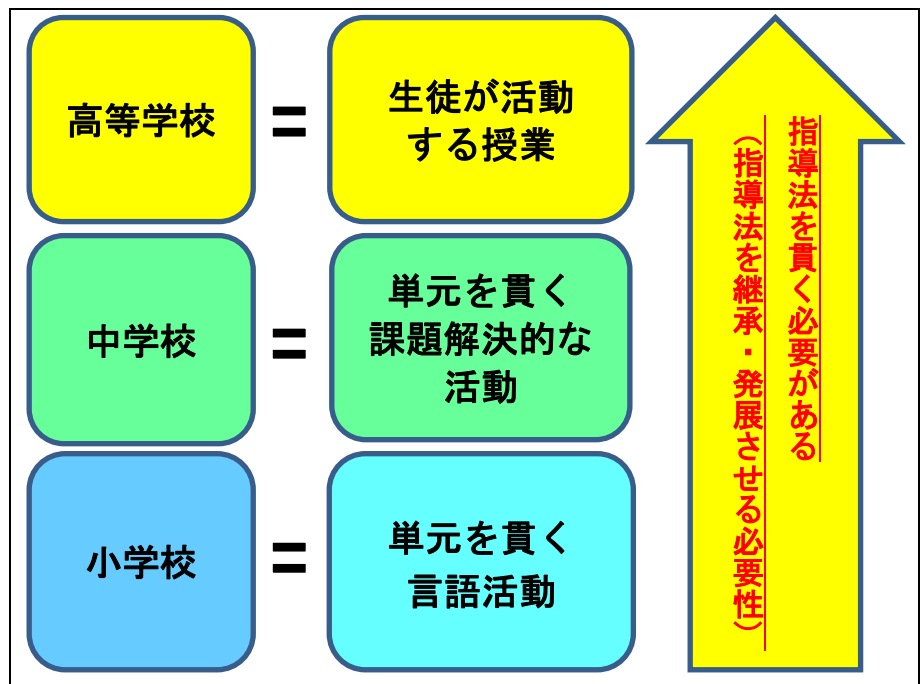
から高等学校までの12年間の指導内容を把握した上で、指導内容を系統付けて指導する必要があるのです。高等学校で指導する場合でも、小学校や中学校の指導内容の定着状況を見極め、生徒個人の能力の問題として定着を生徒の努力に委ねてしまわず、実態に合わせた指導を工夫しなければなりません。それが指導内容を貫くという意味です。

また、【図3】のように小学校で身に付けた「単元を貫く言語活動を位置付けた授業」を中学校や高等学校でも継承し発展させていくことが、指導の効果を高めることにつながります。

同じ指導法にすることで、児童生徒が言語活動に慣れ、学年が上がるにつれて短時間で活動できるようになります。そのことが「時間がかかって児童生徒主体の授業展開をつくることは難しい」という課題を解決することにもつながります。



【図2】12年間の指導内容を貫くイメージ図



【図3】12年間の指導方法を貫くイメージ図

Ⅳ 「授業づくりガイドブック」の構成

このガイドブックは、下のように「Ⅰ 理論編」「Ⅱ 実践編」「Ⅲ 資料編」の三部構成となっています。

「Ⅰ 理論編」では、学校教育の中で国語科が果たすべき役割として、どのような態度や能力を育成すべきなのか、その方向性を示しています。そして、そのためにはどのような指導が必要で、どのような手順で授業づくりをするべきなのかまとめられています。その中で、単元構想の仕方、本時の構想の仕方のモデルとなる学習過程を提案しています。

「Ⅱ 実践編」には、これまでに単元開発してきた中学校第1学年から中学校第3学年までの六つの単元の実践例を載せました。今後は、共同研究員等による小学校や高等学校の実践例も追加していく予定です。

「Ⅲ 資料編」には、「Ⅰ 理論編」の根拠となる資料や具体的な説明資料を載せています。

Ⅰ 理論編

- 1 国語科で育成すべき態度や能力
- 2 どのような指導が必要か
- 3 「授業づくりの手順」と「指導の充実」
 - (1) 目標や内容の系統性を把握する
 - (2) 年間指導計画を工夫する
 - (3) 単元を構想する
 - ◆A 多読や一冊の本を丸ごと読むことにつながる学習過程
 - ◆B 一教材文で表現する学習過程
 - ◆C 一教材文を表現モデルそのものにとらえる学習過程
 - (4) 本時を構想する
 - ◆本時の学習過程
 - ◆本時の学習過程の各段階について
 - (5) 評価を工夫改善する
 - ◆評価の進め方（手順）について
 - ◆ノートやワークシート，作品，実演や映像による評価の工夫について
 - ◆ペーパーテストによる評価の工夫について

Ⅱ 実践編

- A 多読や一冊の本を丸ごと読むことにつながる学習過程例（5例）
- C 一教材文を表現モデルそのものにとらえる学習過程例（1例）

Ⅲ 資料編

- ◆PISA 調査における「読解力」の定義，学校教育法における「教育の目標」と「学力の三要素」，学習指導要領「国語科改訂の趣旨」，第2期教育振興基本計画
- ◆指導系統表の整理例
- ◆同一言語活動の系統表例
- ◆マトリックス型年間指導計画表例
- ◆交流充実のための手立て
- ◆思考力・判断力・表現力向上のための手立て
- ◆単元の評価計画例
- ◆単元構想表の書き方

V 「授業づくりガイドブック」で目指す授業像

このガイドブックが目指している授業像について、『竹取物語』の指導展開例を基に before-after の形で説明します。

【図4】を見れば分かるように、このガイドブックでは、児童生徒主体の学習、日常生活に生きる国語の能力の育成や児童生徒が楽しいと思える授業を目指しています。

これまでの指導との大きな違いは、児童生徒に文章を読む目的をしっかりとらせるということです。

単元の課題が児童生徒自身の課題となり、その解決過程で国語の能力を身に付けていく

こととなります。そして、単元の終末で課題を解決し、学習の有用感や達成感を味わわせることが大切です。

「授業づくりガイドブック」には、このような学習展開にするためにどのような手順で授業づくりを進めればよいのかが解説されています。

■改善が進んでいない(before) 授業展開例 (竹取物語)		
単元の導入 ・順番になったから ・教科書にあるから ①ビデオで平安の暮らしを学ぶ	単元の展開 ②音読し、意味調べをする ③古典の基礎(仮名遣い等) ④内容を読解する(あらすじ、人物、心情等)	単元の終末 ⑤冒頭部分を暗唱するなどして、古典に親しむ
この授業展開には、どんな課題があるのでしょうか？ ①子どもたちは主体的に古典を読めているでしょうか？ ②身に付けた知識・技能や思考・判断・表現は他の教材や他教科の学習、日常生活に生きるでしょうか？ ③国語の学習が楽しいと思えるでしょうか？		
■ガイドブックの目指す(after) 授業展開例 (竹取物語)		
単元の導入 ・古典を読む目的 ・学習のゴール ・学習計画を立てる ①家の人に報道記事仕立てで『竹取物語』を紹介する	単元の展開 ②報道記事のまとめ方に沿って読む ③全員が冒頭を報道記事にまとめて紹介し合う(練習と交流)	単元の終末 ④『竹取物語』全文から、自分の好きな場面を選んで、報道記事にまとめる(古典に親しむ) ⑤それぞれの記事を交流する(⇒家の人に紹介)

【図4】 目指す授業像 (before-after)

VI おわりに

国語科では何を指導すればよいのでしょうか。それは、学習指導要領の目標や内容であることは言うまでもありません。ですから、教科書の教材文を読む前に学習指導要領や学習指導要領解説を熟読し、12年間の系統性の中で、指導内容を具体的なレベルまで絞り込んで把握し指導することが必要となります。それが「教材文を教えるのではなく教材文で教える」ことにつながり、「活動あって学びなし」という課題を克服することにもつながります。このガイドブックには、指導内容を系統的・具体的に把握するための工夫がなされています。

また、国語科ではどのように指導すればよいのでしょうか。指導法には様々な方法があることは言うまでもありません。それぞれの学校で児童生徒の実態に合わせて工夫することが求められています。しかし、「指導法には様々な方法があるのだからそれぞれが工夫しなさい」と言われても、悩んでいる先生方にとっては困り感が増すばかりです。そこで、授業づくりの一つのモデルとしてこのガイドブックを作成しました。それぞれの先生方がここからヒントを得て、創意工夫を凝らした魅力的な授業づくり・単元づくりをしてくださることを願います。

なお、作成した「授業づくりガイドブック」は、岩手県立総合教育センターのwebページに掲載されています。